

## 「子ども達の危機を救うために・・・今できること まとめ」

園長 高杉 美稚子

### 1 私の教育論 自分が大好きな子どもにすること

#### 自己決定能力(セルフコントロールできる)のある子どもに すること

子どもは宝ですね。それは子ども自身が宝という意味、私たち大人にとって宝であるという意味があります。子ども自身その存在そのものが、私達家族のもとに命を授かってきた唯一無二のものであるという意味での宝は当然のことですが、実はこどもは私達大人を育てにきたという意味においても私たちにとって宝なのです。

育児というのは、大人が生涯に渡って発達をし続ける過程の中で他にはとってかわるもののないほど素晴らしい行程であり、子どもをみつめることで、自分をとらえなおす大きな契機です。子ども自身の論理に従ってさぐろうとしてみる、わくわくと楽しんで子どもの行動や言動を見たりきいたりすることが子育てのポイントですが、そういう「子育てのおもしろさ」を身につける事によって、子育ては大人みんなにとって「自分自身のための子育て、ひいては自分育て」に繋がっていくのです。

誰も完璧な親に育てられたわけではありません。最初から完璧な親はいないわけです。だから、私達に子育てという仕事が任されているのだと思います。親が完璧になっているのを待っていたら、一生子育てでなんか出来ません。人は親になることで、もう一度、自分が通り過ぎなかった発達レベルを繰り返し体験することが出来るのです。人は親になることで人間にもう一度なるのです。いえ、本当の人間になるのです、といたらいいすぎでしょうか？自己実現は一生です。[子育ては自分育てである]ことのゆえんは、ここにあります。

今、自己肯定感を持つこと、自分を愛することが難しい時代だといわれていますが子育ては自分が成長するまたとないチャンスです。子どもを生み、子どもを愛し、自分は100点満点であるという自己肯定観を持つようにサポートするプロセスはまさに、再度、親自身が自分を愛し、自分に自己肯定感を持つためのプロセスです。

愛されずに育った人も、自分が子どもを愛し、子どもに愛されることによって自分を愛することが出来るのです。子ども達は、私達、親を育てるために、私達のところに生

まれてきたのですよ。自分に自信がもてないおかあさん、自分を認められないおかあさん、いつも不安なおかあさん、そして自分が好きになれないおかあさん。だから、心配しないで。自分の人生の生きなおしをしましょう、もう一度。子育てを通して。ここに子どもが宝であることのもう一つの意味があります

でも最近では、この宝をどうやって大切にしたら良いかがわからなくなっています。大事にしすぎて壊しているとさえ思えます。それはなぜかという、今、子どもを育てている世代の親が、偏差値という序列化された数値によって自己のポジションを築いてきた世代であること。評価と指導の中で、自己の人格形成をしてきたので、他者や数値によって評価される自分しか実感できずに悩むのです。だから自分に自信を持つことが出来なくそれが育児不安にもなり、親自身の実感としては自立が完了する前の子どものまま親行を営まされているようなものなのです。

自分が不安だから親の子どもへの過ぎたるかわりー過保護、過干渉、過期待、過放任 をしてきてしまっているのです。このように、過去を顧みることとはとても重要なことです。しかし過ぎ去った過去は取り戻せません。むしろ、新たなスタートラインに立つことが大切です。

自己実現は一生です。今日も明日も、いくつになっても成長することは出来ます。一生、人間は生涯教育です。変えることの出来ない過去をどうするかではなく、今をどう生きるかであろうと思います。過去にとらわれれば、不満が残り、未来をわずらえば不安になります。「今ここに生きること」を精一杯実現すればそれがやがて、いえその瞬間に過去に未来になります。過去と他人は変えられない、自分と今は変えられるのです。子どもを鏡として親が変わるのです。だから子育ては親育てなのです。そして親や子どもだけでなく人は人と会うことによって人になるのです。だから、生まれてくる子どもは宝なのです。

結論として教育は何より自己肯定感が持てること、即ち自分が大好きな子どもに育てること、自己決定能力のある子どもにすること以上のものはないと考えています。

## 2、犯罪の低年齢化、凶悪化について

この子ども達の危機を食い止めるために私達大人はどうしたらよいのでしょうか。そしてどうやって、子どもと一緒に成長できる親であることが出来るのでしょうか。

子ども達の危機、家庭の教育力の低下、地域の教育力の低下、学校の教育力の低下は、前号で述べたとおりです。そして、次には、子ども自身の脳の問題があります。

このような背景の中で、子ども、それも普通の子といわれる子が切れていくのは、東京都の調査によると、教師よりも友達関係の中で切れていることが多いという結果が出ています、しかし、どれも切れるには、小さな出来事が多いのです。つまり、問題は、切れるその前にその小さなことを解決する手立てを持っていないという結果なのです。

子ども達が実際にむかついたときにとった行動は、三種類に分けられることは既に述べましたが、1には相手や自分を攻撃することです。2には、自己防衛をして感情を閉鎖することです。3にはセルフコントロールをすることです。感情を上手にコントロールしたり、コミュニケーションによって問題を解決できないために攻撃的で、短絡的な形で、暴力が噴出しています。

1では攻撃のほかにいじめや万引きもあるでしょう。

万引きは、幼児でもあります。愛情不足から、自分には足りないものがあると感じそれに変わるもの、愛情に変わるものを求めているのです。自分には足りないものがあるのだから不公平だから万引きしても当然であるという深層心理もあります。また、かくれんぼの遊びの意味は見つけてほしいことですが、それと同じ、「こっちむいて行動」です。しかられてもストローク（なでる、さする、そのひとの存在や価値を認めるための言動や働きかけ）がないよりマイナスでもストロークがほしいのです。

いじめは幼児では基本的にはないと私は、考えておりますので、東京芸術大学の深谷和子教授の言葉を借りるといじめの原因は、

絶えず評価され、ランク付けされていることによる精神的疲労

自分が尊重されていないことへの不満

遊びの機会が減少していることによるはげ口のなさ、

人間関係にかかわるルールがあいまい

人に関する共感性が減少

発達段階の初期に繰り返されるけんかや意地悪体験の不足

集団の健康性と非行抑止力の低下による子ども集団の変質があります。ストレスと人間関係能力のコミュニケーションスキルの問題です。

いじめは 優越感 ストレス解消 ゲーム感覚という面白さも含んでいるからです。弱いものいじめと言う言葉の定義がおかしいと思うのです。いじめの被害者達を

「自分は弱い人間なのだ」という心理に追い込み、加害者を告発する勇気を奪う役割を果たしているし、思春期はプライドが高いので、男の子は特にジェンダーバイアスも重なって、余計に被害を告げることが出来ず、他人に救いを求めることが出来ずに追い詰められた精神状態になって、一人で苦悩を抱え込むのです。しかも弱いものいじめは卑劣な行為ですから加害者は「自分は人間に絶対に許されないようなことをしている非人間的な存在だ」というフレーズに吸い寄せられ、非人間的な存在だと思込み、立ち直る機会を奪っているのです。保護者も、「私は我が子をそんなにひどい人間に育ててしまった」とショックを受けるのです。

いじめ克服の最大の視点は、いじめられるものの立場でというよりも、いじめをしたくなるようなストレス源を取り除き、いじめの加害者をいじめ行為という人間虐待の非人間的な世界から救済すること、人間的発達を促す教育をいかに出来るかにかかっているとします

子ども達は、むかついたときに言葉によって、自分の感情を伝え、相手とのやり取りの中で自分のむかつきを取るプロセスを取れなくなっています。それは自己評価が低いからなのです。この自己評価が低いというのは、自尊感情が育っていないということです。自尊感情が高ければ、いかに状況が悪くても、単純に切れることは少ないと考えられます。なぜなら、常に自分が受け入れられているという安心感や精神的な充足感が大きい為に、爆発的な感情表現や攻撃的行動によって、自分の心の落ち着きどころを求めないからです。子ども達の自尊感情が損なわれた原因は、「良い子を演じるストレス」です。良い子ばかりか良い子になれなかった子どもも抑圧され、ゆがめられているということです。

さて、では我が子を犯罪者のしないためにはどうしたらいいのでしょうか。家庭でのポイントは「過干渉・過期待」です。「過干渉・過期待」が怖いのです。過干渉・過期待はすべて親の善意から出発しています。だから、親は気づかないのです。でも善意だからこそ逃れられなく、子どもは真綿で優しく包まれるように苦しむのです。そして切れていかざるを得ないのです。

教育現場では、それは今、出来るようにする「教え」から、「わかる喜び」を感じられる学びへと転換する必要があります。そのために必要なことは、子どもの知的関心に訴えかけ、一人一人の学習意欲に火をつけることです。そのためには学校づくりに参加すること、そのことによって、一人一人の意識の中にプライドと共に自己責任感が形成され、自覚が高まり自分達を尊重し、自分達の意見に耳を傾ける大人への信頼関係を子どもたちに形成するのです。学校で難しければ、ボランティア活動もいいと思います。他者とのコミュニケーションを求めている若者は、連帯行動という他者とつながることによって自己存在を確かめることが出来るからです。

参考文献 尾木直樹著「子どもの危機をどう見るか」

### 3、今、子どもの脳が危ない

家庭のしつけ、学校教育だけではなく、犯罪にいたるには、もう一つの要因として、脳の形成異常もあることを知っておいて頂きたいのです。これは犯罪暦の結果から、出したデータの答えであって、この事があるから、必ずそうなる恐れを抱いては危険であるということを前提に理解して頂きたい話です。

このようなデータがあります。刑法犯罪 250 万件の認知件数は、殺人 1200 件に比べると 2000 倍の量です。交通関係に犯罪を除いても 100 倍です。そのくらい殺人という犯罪は犯罪の中での数としては少ないのですが、その中のデータを調べてみると

「精神鑑定で精密鑑定を受ける犯罪者は殺人者の中の 47 人中 30 人 64% その中でも大量殺人者を犯した者の内、15 人中 10 人、67%に脳の形成異常が認められる。脳の形成異常は人口の 1%といわれているので、人口 1 億 2000 万人中 120 万となり、年間の殺人者 1300 人の約半分とすると 689 人 120 万人を 689 人で割ると 10 万人中 57 人 異常がない人はその残りだから 689 人を引いた 6411 人になり、これを割ると 10 万人中 0.51 人 とすると形成異常の人が危険を冒す確率は約 100 倍となる。これは一年間の数だから、一人が 70 年生きるとして 70 倍すれば 0.04 だから、4%となり 25 人に 1 人という人が犯罪を犯す確率になる。大量殺人者は脳の形成異常者の 3 分の 2 というデータがあるので、同じ計算をすると 200 倍になる。」

このデータは福島章先生の著者から抜粋したのですが、脳に異常がある人が大量殺人を犯す確率は、異常がない人に比べると結果として、200 倍になるというものです。しかし、冒頭に書いたように 25 人中 24 人は犯罪を犯さない確率なわけですから。確立が 200 倍といっても、脳の形成異常の人が必ず犯罪を犯すというように考えていただいても困るのです。でも、親や、学校現場での教育では手の届かないこともあるということを知っていてほしいのです。そして、脳の形成異常があるという縦軸に、家庭や公教育のまずさという横軸がクロスしたときに、このような大量殺人が起きるという可能性はあるのです。反対にいえば、仮に脳の形成異常があったとしても、教育しただけで、いくらでも防ぐことができるといえるのです。

だから、福島先生は、下記のように考えておられます。最近増えてきた早幼児期脳障害、脳の形式（異常クモ膜のう胞、脳室壁の形成異常）異常 微細細胞障害は他動のような行動や性格の特徴の根底にあってその原因となっている、生物学的異常を明示するものである。これは胎児期から乳幼児期にかけて脳の微細な形勢異常を起こすようなリスクが子どもの生きる環境の中で増大してきたからである。

早幼児期脳障害、脳の形式（異常クモ膜のう胞、脳室壁の形成異常）異常はなぜ起こるか

1.一つは環境ホルモンと呼ばれる微量の科学物質が性放るも作用や甲状腺ホルモン作用によって脳にさまざまな影響を与えている。 アメリカの五大湖オンタリオ湖周辺

2.一つは流産予防の黄体ホルモンによる超男性化 これは反対の論文も多い

3.一つは犯罪心理学者 福島章さんが考えるテレビの悪影響 刷り込み タレントやスターなど現実にはまったくあったことがない人に付きまとうがあります。

### 「テレビっ子と注意欠陥多動障害」

「シュタイナー教育法は独特の幼児教育で定評がある。そのシュタイナー学校のある教師は、教師が担任する学童に童話、聖書、伝記、神話などを読んで聞かせることが子どもの心の成長に大切であると考えているが、彼女はまた、テレビやテレビゲームが未成熟な子どもに大きな影響を与えることを明敏に観察し、次のように警告している。「テレビやテレビゲームで遊んでいる子どもはすぐわかります。とくに男の子に多いのですが、リモコンで操作されたようにぎこちない動きになるし、視線が定まらず、キョロキョロしていて、集中しません。このような子どもに絵を描かせても、ふつうの人間ではなく、エイリアンみたいなものを書いてしまうのです。子どものためにはテレビを見せない方がよいと思います。」（横川和男「もうひとつの道」共同通信社）つまり、幼児教育の専門家は、テレビを見て育った子どもは総じて注意欠陥多動障害（ADHD）のような言動を示し、人というもののイメージが崩壊してしまうことを指摘しているのである。環境ホルモンと同様に、テレビもまた子どもの性格形成や行動パターンに大きな影響を与え得ることを見抜いているのであろう。」（注）ADHD注意欠陥他動障害は行動をまとめて表現しただけでその原因をさしめしているわけではない。

### テレビは基本的な脳のシステムを変えてしまう

脳が働く基本的なプログラム、つまりコンピューターに喩えていうなら、そのオペレーション・システム（OS）というべきものも現代では大きく変わってきていることに注目しなければならない。オペレーション・システムは、脳のハード完成と、平行してつくられる。発達心理学的にいうなら子どもが言葉を獲得する生後の2～3年間、精神分析的にいうならばほぼエディプス期に、完成しつつある脳の形態・構造と、それまでに入力される情報の質と量によって、どのようなOSになるかがきまる。」

「まず質的な変化である。昔は、母親の乳児に対する語りかけのような、人間的・言語的・二人称的な情報が主であった。今は、赤ちゃんが産院から家に戻ってきた瞬間から、テレビからの映像や音響などの機械的・イメージ的な情報を一方的に受容するようになるという「情報の質」の変容が注目される。子どもは絶え間なく情報を発信する小箱を眺めて、その多彩なイメージを入力し、またバック・グラウンド・ミュージックのように鳴りつづけるその音を知覚しながら、いわゆるバーチャルな情報にさらされつつ毎日を過ごすことになる。」

## 結論として2歳まではテレビを見せないことが大切

「もちろん、だからといって、日本をテレビのない半世紀前の時代にもどすことはできない。だから、この情報化社会の中でも工夫をし、子どものパーソナリティが短い期間に劇的に変わらないような工夫をしなければならない。第一は、親が個人としてできることがある。それはまず、乳児期にはテレビを子どもから隔離することである。つまり、乳児がいる部屋にはテレビをおかない。人生の最初期（1から3年）の情報入力 quantity と質こそが、脳のOSの形成やその発展に大きな影響を与えるからである。とくにその中でも、乳児期（0～2）が最も大切なのである。さらに、幼児期になってテレビを見せる場合も、その視聴時間は1日1時間以内に制限するのがよいだろう。子どもが見る番組は、親が選択することが望ましい。これは、子どもの人格形成に親が責任を持つ、ということにほかならない。」

「しかし、子どもが幼稚園や学校に行くようになれば、テレビをまったく見ないわけにはいかない。テレビの人気番組を見ていないと、その子どもは仲間との会話に困るエイリアンになってしまう。したがって、この時期になったら、あまり極端な制限・禁止は良識的とはいえない。さらに4～5歳ともなれば、いわゆる脳のOSの基本は既に行きあがっているから、もしテレビから悪い影響を受ける部分があったとしても、それは親子関係やカウンセリングで矯正が可能である。」 「子どもの脳があぶない」福島章 PHP新書 より

### 神経心理学者 ジェーンハーリーさんが考える悪影響

#### 「テレビの見すぎは うつ気分を呼ぶ」

「知能を最大限に発揮するためには、右脳と左脳がうまく協調して働かなければならないが、それには数多くの連結を発達させなければならない。動きの速い、主に視覚的なソフト（コンピューターゲームなど）の中には、左脳を犠牲にして右脳を刺激するものがあり、それをやりすぎると言語能力などの左脳の技能に支障がでるのではないかと疑われている。新しい研究によると、情緒の発達にも影響を及ぼすようである。右脳の活動には否定的な気分（悲しみ、無気力、ゆううつ）が伴うこと、そして幸せだったり気持が高揚しているときには左脳が活発に働いていることに科学者たちは気づいている。また、テレビを見すぎるとしばしば否定的な影響が現れ、時には軽いうつ状態になることも明らかになっている。ある心理学者は「一度にテレビを見る時間が長くなるほど、気分はますます落ちこんでくる」と言っている。また、長期にわたって右脳を働かせる人はうつ状態や不安障害に陥りやすく、さらにはほかの病気にもかかりやすくなるという。右脳の過度の活動は免疫系を抑制する傾向があるからである。」

「右脳ばかりを酷使して左脳をあまり使わないようなソフトを使っているコンピューターっ子は、特に危険が大きい。4歳児を対象にしたある研究によると、左脳の活動が優勢な子どもは社会的能力が優れ、右脳が優勢な子どもは引きこもりがちだったという。はたしてコンピューターの使用がそうした神経生理学的な変化と関係があるのだろうか

は興味深い問題である。」情緒への影響「創造的な発明の多くは、心的なイメージ形成力」がもとなる。しかし、映像刺激づけの今の子どもたちは心に独自の像をつくったり、創造的な表象を発展させることができない、と教師たちは報告している。今の幼い子どもたちの多くは象徴的な遊びや見立て遊びを教えてやらないとできないと教師たちは嘆く。以前は精神的、情緒的な問題のある子どもの症状だったものが、今の子どもたちの多くに見られるのである。」

「コンピュータが子どもの心を変える」ジェーン・ハーリー 大修館書店より

長時間受け取っていた子どもは、視覚信号ばかりを脳に送ることになります。脳はその信号に合わせて、システムづくりをしていきます。1秒間に6回以上点滅するデジタル刺激であるテレビやビデオを長時間見ていた子どもの脳は、その刺激に合わせた視覚を形成する可能性が高いでしょう。乳幼児期（とくに1歳半まで）の間長時間、ビデオやテレビを見ていた子どもが、手足が不器用で、体のコントロールが苦手な多動で、人間には視線が合わず、直線や光るものにばかり固執する子どもになるのは、当然の結果といえないでしょうか。

参考文献 福島章著 「子ども脳があぶない」HPより

このゲーム脳というものは、呼吸が浅くなり、切れやすくなるといわれています。何がどうなるかわからない時代ですが、上記の先生方の考え方を見るだけでも、家庭で、何か、出来る事が見えてくるような気がします。少なくとも、今の生活を少しでも見直すことは出来るかもしれません。先のことを不安に思う前に、今、出来る事、少しずつ、見つめてやっていきましょう。

手をこまねいていても、現状は、変わりません。私達で、子ども達の為に出来る事を、出来るだけいいから、自分で出来る範囲で、無理なく、始めましょう。

でも、過保護、過干渉、過期待、過放任にはならないように気をつけて・・・

さあ、子育てを今一度、始めましょう。今日からでもいいのです。遅くてもいいのです、あせらなくていいのです。自分のペースでいいのです。始める事が大切です。気づく事が大切なのです。でも問題の奥底にあることにしっかり目向けていきましょう。目先のことに振り回されずに。大丈夫、だってお母さん、あなたはこんなに、自分の子どものことがかわいいのですから。大好きなのですから、子どもの事を大切に思わない人はここまで読んで下さっていません・・・から。子どもを愛せているお母さんはその事で自分を愛せることが出来るようになるのですから、すべて大丈夫です。自分のことを信じてゆったり、子育てをしなおしましょう。

子育ては、長い。でも、過ぎてしまえば、いとおしいくらい、悲しいくらい短い。もう一度したくたってできないの。過ぎてしまえば、こんなに輝いていた時間はないのですよ。だから、お母さんが一番喜んで、子育てをお母さんが楽しめば、子どもが一番生き生きとしてくるのです。その姿を見て、何よりお母さん、あなたが、一番幸福になれ

るのです。だから、ムリせず、楽しんで、がんばりましょう。楽しんでする子育て 20 年、苦しんで、する 20 年。どちらも同じ 20 年です。